



世界発

2008

■「生きている図書館」を開くための手引
欧州会議の人権教育関係サイト (<http://www.coe.int/hre>)から、「本を表紙で判断するな! / 生きている図書館の開催者ガイド」の英語版「Don't judge a book by its cover! / The Living Library Organiser's Guide」やフランス語版などがダウンロードできる。



「私が『独身』『内気』『親を憎んでいる』と思う? すべて間違い。それが偏見」と、「読者」に語りかけるライトさん=ロンドン、土佐写す

生きている図書館

私たちが借りてみませんか?

元マフィア、移民…

元マフィア、移民、性転換者……。市民がふだん近づきにくいと感じている人たちが図書館に招き、話を聴きたい入館者に「本」として貸し出す。「生きている図書館」と名付けられた活動が欧州から世界各地に広がっている。社会の偏見を少しでも減らす試みだ。

(ロンドン) 土佐茂生、大野博人

「顔のこと、きいてもいいかしら?」

「もちろん。4歳のときにケルビズム症になったの。子どもの天使『ケルビム』のよろにボチャツとした顔になるの。でも、病名が堅苦しくなから、ステキでしょ」

女性2人の笑い声が響く。「あなたを借りて楽しかった」という若い女性を、ピクトリア・ライトさん(29)は笑顔で見送った。アゴの骨が異常発達して目が突き出る遺伝病を患う。先月31日にロンドン東部であった「生きている図書館」に初めて参加した。

「じっくりと自分を説明できて気持ちよかった」この日の「本」のカタログ

には、ほかに性転換者、レスピアン、イスラム教徒、女性消防士、移民など26人が並んだ。それぞれによくある偏見の例が付記されている。イスラム教徒だと「過激派」「女性軽視」といった具合だ。

「読者」は読みたい「本」を借り、30分間一対一で話を聴くことができる。「本」たちは「あなたの偏見は何?」と胸に書かれたTシャツ姿。リンダ・コンスタブルさんは、性転換手術をした男性ケリーさん(63)を借りた。

「家族は?」「ペットだけ。39歳の娘とは音信不通なのよ」最初はきこえない会話が続

く。そのうち、ケリーさんから逆に質問が出る。「あなたの3人の息子のうちのどれかが性転換手術をすると言ったらどうする?」「幸せになるなら応援したい。でも、難しい人生を選ぶことになるわね」

「そのことばこそ息子に必要なものよ」

会話は30分を超えた。「どこか違う人間と思っていた。でも共通点が多くて驚いた。最後は友達のように思えてきた」とコンスタブルさん。

「本」にとっても多くの発見があったようだ。「私にも偏見があったと気づいた」とライトさん。視線を感じると

「私の変な顔を面白がっている」と思い込んでいた。「人が何か違うものをジッと見る

「少し危ない」が人気

「生きている図書館」は00年にデンマークで、暴力追放をテーマにしたロック音楽祭の企画として始まった。いまでは欧州諸国やオーストラリア、ニュージーランド、トル

の自然なのね。なのに勝手に傷つけてきた」と話す。「本」たちには踏み込んだ個人的な質問にも答える心の準備がある。「読者」はふだんの生活では持ち出しにくい疑問も率直に尋ねられる。

「読者」の動機は様々。コンスタブルさんは「『本』はつらい時期を乗り越えてきた人たち。家族も悩んだと思う。私もいつか敵しいときを経験するかもしれない。それを克服するヒントがあるので」と思っていると話す。「違う世界に住む人が集うパーティーに参加する気分」と気軽にやって来た人もいた。

この日は、1000人の「読者」が利用した。一番人気は「元ホームレス」で8人が借り出した。

ただ、たとえばイスラム教徒なら過激な原理主義者のよろに、かえって偏見を強めかねない人選は避けるといふ。ポスターなどでも広報するが、昨年トルコのロック音楽祭でテントを会場に開かれたときのアンケートでは、「読者」の半分以上がテントの近くを通りかかって気づいたと回答。多くの場合、ちよつと

した好奇心が「読者」のきっかけのようだ。それでも体験後は99%以上が「ほかの人に勧めたい」と答えている。

話した方が理解進む

ばかばかしい偏見がしばしば暴力的な対立を引き起こす。ヒップホップファンとヘビーメタルファンの間で始まることもある。だが、相手を実際に知れば暴



発案者の1人 ロニ・アバゲール氏

デンマークで政府や暴力・犯罪予防のNGOなどに勤務。現在は大学でジャーナリズムを研究中。35歳。

力に発展しにくい。たとえば「イスラム教徒は出ていけ」なんて毒づいていても、知り合いになったアラブ人には「やあ、元気がいい」と声をかけて握手する。

知らない人たちについて

はだれもが行き過ぎた一般化をしがた。だがそれを解消する機会があまりない。メディアでの討論では

極端な意見の対立が前面に出て、多くの穩健な考えが軽視されがた。「生きている図書館」は

そんな一般化への対抗策だ。カトリック文化の強いポーランドだったら同性愛者への偏見を取り除くのに、ハンガリーなら警官とロマ人の対立を和らげるのにいいかもしれない。日本でも試みてはどうか。たとえば中国からの移民に「本」になつてもらえば互いの理解も深まるのではないか。

「本」になる人も「読者」の疑問を知ることができる。偏見の犠牲になる人と偏見にとられる人の両方に寛容な姿勢を築くことになる。だれかを話題にするより本人と話した方が理解は進む。